

## 「いじめとどう向き合うか」 人の生き方を通して

～ 小説『かあちゃん』（重松清）を題材に ～

- ◆ 本教材は、国立大学法人鳴門教育大学「いじめ防止支援機構」の客員研究員、違谷健治が開発したものです。
- ◆ 題材は、重松清さんの小説『かあちゃん』（2012年、講談社文庫）です。
- ◆ 小説の内容などのウェブページでの公開、ダウンロードによる活用に関しては、講談社の許諾をいただいています。
- ◆ なお、本教材をご活用いただいた際は、簡単で結構ですので、お気づきの点や児童生徒の皆さんのようすについて、メール等でご連絡いただけるとありがたいです。よろしく願いいたします。

《 本教材に関するお問い合わせ先 》

鳴門教育大学 生徒指導支援センター 竹口 佳昭

TEL：088-687-6381 FAX：088-687-6500

E-mail：ssgc-ctr@naruto-u.ac.jp

〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748

鳴門教育大学 生徒指導支援センター

# 「いじめとどう向き合うか」一人の生き方を通してー

＜教材＞ 小説『かあちゃん』（重松清）

## 【 1. ねらい 】

いじめの発生を抑止するために、いじめを容認あるいは助長する一つの要因となる「傍観者」をいかに「仲裁者」に変えられるか、ということが課題とされている。しかし、仲裁に入ることによって自分が標的になるかもしれないという不安を抱える傍観者にとって、いじめに立ち向かうことは容易なことではないだろう。

本作品では、いじめから友だちを救えなかったことに苦悩し、葛藤する中学生の姿が描かれている。そして、葛藤の中で一人の人間の生き方を通して、自身の責任と向き合おうと決意するまでに至る心の変容が描かれている。自分が日常生活の中で同じような状況に迫られたとき、どのように行動すべきかを考える一助にさせたい。

## 【 2. 解説 】

自分の身の周りにいじめが発生したとき、どのように行動すべきか。「見逃してはいけない」「止めに入らなければいけない」と頭の中では理解しているつもりでも、実際に行動に移すことは極めて難しいのではないだろうか。いじめの標的が自分に向かうことを恐れ、見て見ぬふりをしてしまう、さらには心ならずもいじめに加担してしまうということは、決して稀なケースではないだろう。

本作品では、いじめに加担してしまった中学生が、自身も被害者の立場でありながら結果的に犯してしまった過ちに対して、「負うべき責任とは何か」「どのように償うことができるのか」と自問し、悩みと葛藤の中から成長していく姿が描かれている。

資料1・2で描かれているように、中学生の河野啓太と本多敏之は、いじめの首謀者である松谷浩司に脅され、従わなければ標的が自身に向くかもしれない恐れから、自分たちの仲良しの友だち黒川久志に対するいじめに加担してしまう。いじめの被害者である黒川は追い詰められて自殺未遂にまで至り、そのまま遠くの街に転校してしまう。自責の念に苛まれる啓太は学校に行けなくなり、自身も引っ越すことになるが、転校した学校でも不登校が続く。そんな啓太が自身の責任と向き合い、行動を始めるきっかけになったのは、自ら責任を背負い罪を償いつづけたある一人の女性の生き方を、母親から聞かされたことである。

資料3では、その女性が夫の巻き込まれた交通事故の責任を背負い、罪を償うに至るまでの概要が描かれている。自分の夫が運転する車が、半ば被害者的な立場とはいえ交通事故に巻き込まれて、夫は亡くなり、助手席に同乗していた夫の上司も犠牲となり命を失ってしまった。女性は、「不可抗力だから負い目を感じる必要はない」との周囲の言葉を振り切って、上司の死に対する夫の責任を一人で背負い、自身の人生を犠牲にして全てを償いのため費やす人生を選ぶ。遺族へ

の償いのため、自身の楽しみや安らぎを頑として拒み、笑うことさえ許さずに働き続け、遺族への送金を絶やさず、毎月の墓参りを欠かさない生活を 20 数年間続けた。

この女性の夫の上司は、実は、啓太の祖父（母親の父）だった。啓太は、いじめへの自責の念に苛まれていたときに、母親から、自らに償いの人生を課したこの女性の話を初めて聞かされた。不本意にも巻き込まれてしまった交通事故の話と、心ならずもいじめに加担し友だちを自殺未遂にまで追いやってしまったいじめ事件が、啓太には重なって写った。そして、自身の責任から目を背け、逃げてしまった自分を振り返ることになる。

償いの人生を送った女性の生き方をどう捉えるかは、いろいろ考え方があろう。しかし、友だちを救えなかったことへの後悔、自責の念に耐えきれず、自身の殻にこもって身動きできなかった啓太にとって、この女性の生き方への共感が、前に向かって動き始める大きな糸口であったことを捉えさせたい。

以下、本教材では扱っていないが、作品中のその後の啓太の姿に言及しておきたい。

自身の責任と向き合うことを決意した啓太は、2 年になった 5 月に転校先から元の学校に戻ったが、そこではいじめの首謀者である松谷の標的が本多に移っていた。友だちの黒川を救えなかった啓太は同じ過ちを繰り返すまいと、本多をかばい、共に松谷に立ち向かう。以前とは違うその姿を周りも認めたように、転校していたわずかな期間に啓太はどこか大人っぽく成長していた。そして、いつか、必ず黒川に会いに行く決意を本多に伝える。会ってもらえるかどうかかわからなくても、謝りに行く。お詫びの言葉は受け取ってもらえなくてもいい。「ずっと、一生、自分のやったことを忘れないから」とだけ伝えたい、という思いを語る。

本教材では、心ならずもいじめに加担してしまった立場の苦悩や葛藤に焦点をあてたが、原作はいじめを主なテーマとして描かれた連作短編集であり、各章で主人公が入れ替わる。そのため、一部抜粋の形をとった資料が少し読み取りづらいものとなってしまったことは否めないが、教材として扱わなかった他の章では、いじめの首謀者、松谷浩司の背景が本人や他者の視点から描かれており、いじめを取り巻く様々な人間関係を考える上で多くの示唆を含んでいる。松谷の家庭は崩壊状態であり、自身も先輩から脅され、無理な要求を命令されながらも、従わなければ孤立してしまうことを恐れている存在なのである。いじめの複雑な構図を捉えた秀逸な作品であるので、先生方には是非、ご一読をお薦めしたい。

### 【 3. 指導例 】

事前指導 資料1・2を読み、ワークシートに各自記入させておく。

(展開例)

	学習活動と発問	指導上の留意点
導入	○ 資料1・2を読み、ポイントを整理する。	・資料1・2を併せて読み取らせることでいじめの状況をつかませる。
展開	<p>1～4について考えを発表する。</p> <p>1. 仲良しだった友だちをいじめてしまった二人はどんな思いだったのだろうか。</p> <p>2. いじめに加担してしまった二人をどう思うか。</p> <p>3. いじめに加担してしまったことに苦悩する二人は、このあとどのような行動をすべきか。</p> <p>&lt;資料3を読む&gt;</p> <p>4. 事故の責任を背負った女性の生き方を啓太はどのように捉えたか。</p>	<p>※様々な考えをできるだけ多く引き出し、意見交換をさせる。</p> <p>・いじめに加担してしまった状況を踏まえると共に、後悔の気持ちや自責の念の重さを捉えさせる。</p> <p>・自分自身の生活体験を踏まえながら考えさせ、悩みや本音を引き出したい。</p> <p>・犯してしまった過ちに対する責任とは何かを考えさせる。</p> <p>・女性の生き方がなぜ啓太の心を動かしただのかという視点から考えさせる。</p>
まとめ	○ 自分の身の周りにいじめが起きたとき、どのように行動したいかを各自まとめる。	・本音を大切に、葛藤や悩みも受け止め、成長支援につなげたい。

## <Step 1>

次の資料は、小説『かあちゃん』（重松清著）の、いじめをテーマに描いた箇所の一部抜粋である。中学生の河野啓太と本多敏之は、いじめの首謀者である松谷浩司に脅され、友だちの黒川久志へのいじめに加担してしまったことに自責の念を抱き、苦悩する。

【資料1】【資料2】を読んで、いじめに加担してしまった二人の行動について考えてみよう。

### 【資料1】河野啓太の場合（第三者の視点から描写）

啓太くんは東京の中学で罪を犯した。刑法でいう「犯罪」にはあたらなくても、だからこそ、深く重い罪だった。

去年——一年生の二学期に、学校の同級生をいじめた。相手は仲良しの友だちだった。いじめの首謀者に「おまえもやれ」と脅され、次の標的が自分になるかもしれないという恐怖に駆られて、いじめに加わった。

相手の子は黒川くんという。友恵さん\*（啓太の母親）もよく知っていた。逆に、黒川くんの母親も啓太くんのことはよく知っていたし、友恵さんと母親も、保護者会で一緒になったときにはファミリーレストランでお茶を飲む間柄でもあった。

追い詰められた黒川くんは三学期が始まるのと同時に自殺を図った。それでやっといじめが明るみに出て、啓太くんも自分のやってきたことの罪深さを思い知らされた。

黒川くんは一命を取り留めたあとも学校には戻らず、啓太くんとも会ってくれないまま、遠くの街に転校してしまった。友恵さんも病院や自宅まで何度も出向いたが、黒川くん本人はもとより母親にさえ会わせてもらえなかった。

「もういいじゃないか、具体的になにかを請求されたわけでもないんだし、向こうだってもう思いだしたくもないんだよ」と言ってくれるひとはいた。いじめの実態を調査したクラス担任の教師も、半分被害者のようなものだから、と啓太くんをことさら叱ることはなかった。

だが、啓太くんは学校に行けなくなった。理屈でなんとか納得しようとしても、体と心がそれをゆるさない。三学期をほとんどまるまる休んでしまい、友恵さんも精神的にすっかり疲れきってしまった。

謝ることすらできないというのは、どんなに責められてなじられることよりも重い罰なのだと知った。せめてなにかを黒川くんに伝えたい。見せたい。わかかってほしい。いくら思っても、その「なにか」がわからない。

三月の終わり、友恵さんと啓太くんは父親を東京に残して、この街に引っ越しをした。だが、場所を移り、人間関係をリセットしても、だめだった。どんなに遠くまで逃げても記憶が追いかけてきて、自分を責め立てる。

転校先でも啓太くんの不登校はつづき、友恵さんも途方に暮れていた。

（\*は原文に加筆した部分）

## 【資料2】本多敏之の場合（本人の視点から描写）

僕たちは同級生の黒川久志をいじめた。夏休みまでは「クロちゃん」と呼んでいたのを、二学期からは「黒川」と呼び捨てにして、無視したり、からかったり、殴ったり、蹴ったり、持ち物を捨てたり、いたずら電話をしたり、女子の前で服を脱がそうとしたり、金を持ってこさせたり、おとなしそうな小学生を殴らせたり……ひどいことをたくさんした。

「僕たち」の範囲は広い。ほとんどクラスの男子全員だった。いじめの首謀者は松谷浩司とその一味だったけど、関係ない同級生もみんな松谷たちに「おまえもやれ」と命令されて、「やらないんだったら、おまえを黒川の代わりにするぞ」と脅されて、しかたなくいじめに加わった。その中には、夏休みまではクロちゃんと仲良しだった奴らもいた——それが、僕と啓太だったのだ。

クロちゃんは三学期が始まった日の夜、自宅の風呂場で自殺を図った。手首をカッターナイフで切ったのだ。お母さんがすぐに見つけてくれたので命はとりとめたけど、いじめの事実がわかって、学校は大騒ぎになった。

クロちゃんは遺書を書いていた。そこには、自分をいじめた「特にうらんでいるメンバー」の名前が書いてあった。僕も啓太も、その中にはいなかった。クロちゃんの優しさだったのだろうか。あんなにひどいことをしてきたのに、クロちゃんは、僕と啓太のことをまだ友だちだと思ってくれていたのだろうか。

もちろん、遺書に名前がなかったからといって、僕の罪が消えるわけじゃない。啓太だって同じだ。

担任の水原先生との個人面談で、僕は思いだせるかぎりのことをぜんぶ話した。そこまで正直にならなくてもいいじゃないか、という迷いを振り切って、とにかくぜんぶ。あとで訊いたら、啓太もそうだったらしい。

## <Step 2>

河野啓太は、ある女性が夫の巻き込まれた交通事故の責任を背負い、罪を償い続けたという話を聞いたことがきっかけで、いじめに加担してしまった自身の責任と向き合うことを決意し、元の学校に戻る。

次の資料は、その女性の話を再会した友だちの本多敏之に伝える場面の一部抜粋である。

【資料3】を読んで、河野啓太の心を動かしたものは何かを考えてみよう。

### 【資料3】

啓太が生まれるずっと前、まだお母さんも中学生だった頃、おじいちゃんが交通事故で亡くなった。会社の車が、センターラインを越えて走ってきたトラックを避けようとして、ガードレールを越えて電柱に激突したのだ。助手席に乗っていたおじいちゃんは、その巻き添えになった。運転していた同僚も亡くなって、事故のそもそものきっかけをつくったトラックは知らん顔をして走り去ってしまった。運が悪かったとしか言いようがない。運転していた同僚も、法律的に責任が何パーセントあるのかはわからないけど、被害者は被害者だった。

でも、同僚の奥さんは、事故の責任を背負った。啓太のおばあちゃんやお母さんにひたすら詫びつづけ、申し訳なさを胸に抱いたままの人生を歩んだ。

「そのひと、ずーっと笑わなかったんだって。ひたすら働いて、母一人子一人で息子を育てて、うちにもお金をちょっとずつでも送ってくれて、じいちゃんの墓参りを毎月欠かさずつけてくれて……」

たまたま、その息子さんと会って、いきさつを初めて知った。

「最初は、そんな人生ってなんなんだよ、って思ったんだ。オレだったら絶対に嫌だよ、ありえないよって、あきれてた」

ところが、しだいに胸がじわじわと締めつけられてきた。おじいちゃんとクロちゃんが重なった。一人で何年も墓参りをつづける同僚の奥さんの姿が、実際に見たことはないのに、くつきりと思い浮かんだ。

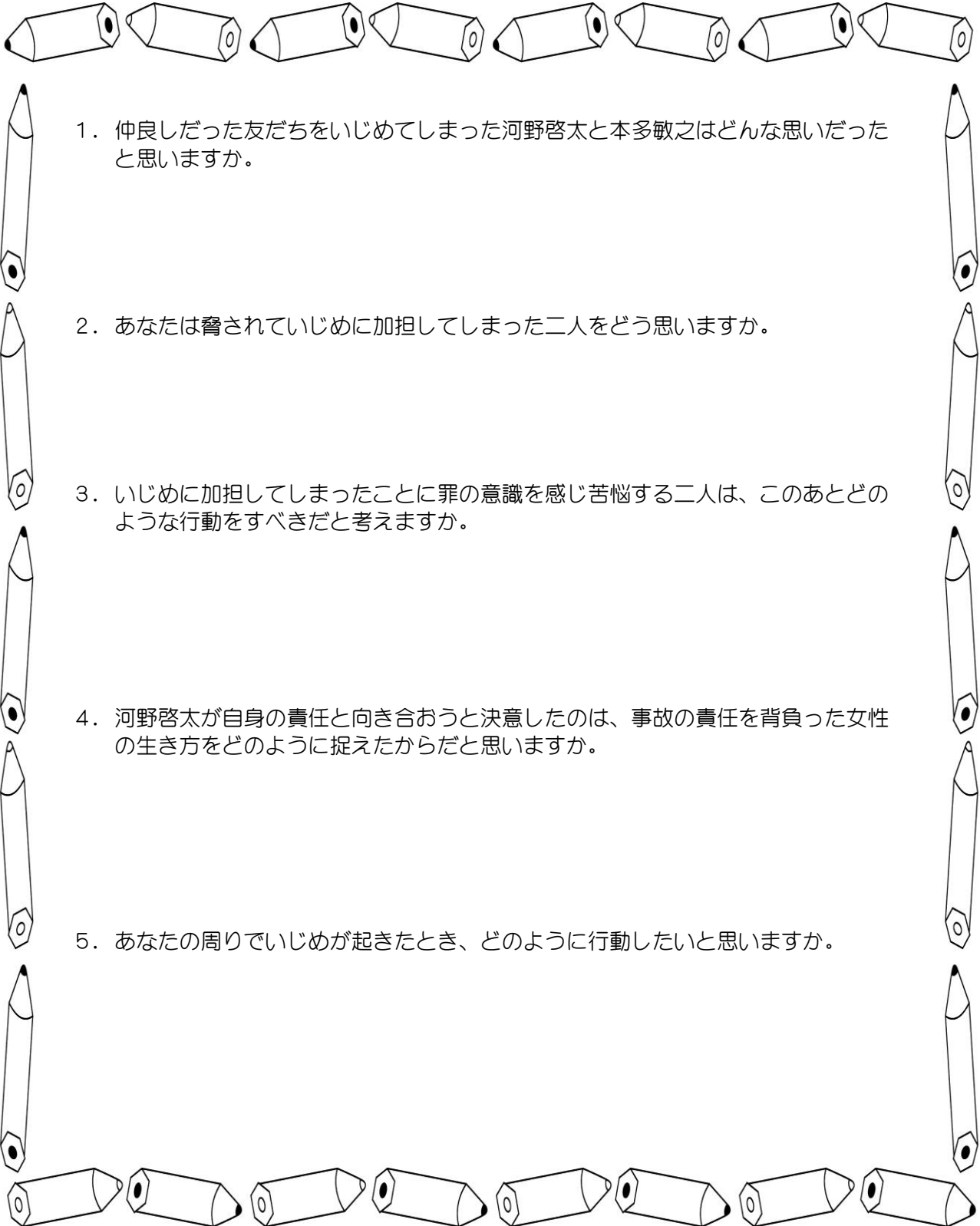
「二十何年だぜ、すげえよ。じいちゃんも、ばあちゃんも、母ちゃんも、幸せだったと思う。現実に幸せか不幸かっていったら、それは絶対に不幸なんだけど、でも……忘れないでいてくれるひとがいるっていうのは、やっぱり幸せだと思うんだよな」

クロちゃんだってそうだ、と啓太はきっぱりと言った。オレ、あいつにやったこと、一生忘れたくない。もっと強い口調でつづけた。

【ワークシート】

## 小説「かあちゃん」の資料を読んで思ったこと

\_\_\_\_年 \_\_\_\_組 \_\_\_\_番 氏名\_\_\_\_\_



1. 仲良しだった友だちをいじめてしまった河野啓太と本多敏之はどんな思いだったと思いますか。
2. あなたは脅されていじめに加担してしまった二人をどう思いますか。
3. いじめに加担してしまったことに罪の意識を感じ苦悩する二人は、このあとどのような行動をすべきだと考えますか。
4. 河野啓太が自身の責任と向き合おうと決意したのは、事故の責任を背負った女性の生き方をどのように捉えたからだと思いますか。
5. あなたの周りでいじめが起きたとき、どのように行動したいと思いますか。